

昭和五二年二月一〇日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社 発行人 滝野 忠

東京都千代田区飯田橋4の4の8朝日ビル401号室 電話(03)261-7079  
振替 東京0158431 労金 東京労金本店No50234

購読料 月額400円 6ヵ月前納制

### 〈もくじ〉

#### ■巻頭言■

先生の著作に学びなおす ..... 2  
社会党第四九回大会と路線問題 ..... 3

— 総括への基本視点 —

◇投稿◇ 右傾化に強まる反抗 ..... 6

— 社会党第四九回大会について —

資料 「五項目」放棄で総評三顧問が意見書 ..... 12

書評 山崎八郎著『芸術は永遠か』 ..... 14

#### 向坂逸郎先生を語る

規則正しい毎日の生活 富田 敏美 ..... 15

日本のマルクス・向坂逸郎先生 中澤 秀行 ..... 15

先生からの手紙で仲間づくりへ 小林 房夫 ..... 17

生まれた子供に先生の名 浅野 隆雄 ..... 17

先生のサイン本は“宝物” 橋詰 弥生 ..... 18

編集部 だよ ..... 11

# 旬刊 社会通信

NO. 257

一九八五年三月一日

一九八五年三月一日

(毎月一日・二日・三日三回発行)

## ■巻頭言■

# 先生の著作に学びなおす

向坂先生が死んだ。死後六時間余たって、夜が白々と明けはじめた頃に知った。電話で呼び起こされ、とっさに先生の死を思った。一月二十二日のことだった。

先生が死んで生前ゆかりのあった人、ない人、敵も味方もそれぞれに何を思ったろうか。独占資本に組する人々はきっとほくそ笑んだにちがいない。「マルクスよりもマルクス」といわれた「硬骨のマルキスト」がこの世に居なくなっただから。マスコミは、「教祖の死」と囃（はやし）立てた。先生の教え（思想）を知ろうともしないで、自分の怠惰を隠すために、宗教と同一視した。

直接にか、または書物を通じて間接にか先生の薫陶を受けた人々、そして、今なおその道歩んでいる者は、先生の思想にますます確信を深めこそすれ、先生を「教祖」と信奉し、その思想を宗教のように神物化したりしたことはなかった。先生の著作を読み、手ほどきを受けて『資本論』をひもとく機会を得た私たちである。宗教のように盲目的に合掌すれば『資本論』の理解が深まるというものではない。

先生の書かれたものは、あたたかみがあって、人生を楽しく、勇気づけてくれる。そうやって先生は、私どもの心のなかに生きていく。「歴史は人間がつくる」に始まる『資本論』の論理が先生を介して、私たちの精神を揺り動かし、強靱にした。『資本論』を「闘いの書」として、また「人生の書」として、したがって、「労働者階級の自覚の書（自伝）」として、心底から考え、その通りに実践された先生にして始めてできることだった。

先生は、「人間がもし人類の進歩に忠実であろうとするならば、識り、考え、批判するだけでなく、自らも、どの分野かでそのために行為する人間でなければならぬ」（『資本論入門』）という思想に、マルクスとともに最も忠実であった。先生の生涯もまたそのために費された。

先生は八七歳の生涯を終えられた。常づね先生は「人生とは闘いの旅である」といわれ、自らの信条とされていた。先生の旅はむろん「社会主義の旅」であった。だからその旅は労働者階級とともに歩む旅であった。「労働者の招き」には「時間さえあれば喜んで」出かけられた。それはまた、「自分との闘い」の旅であった。しかも、「社会の進歩、成長に対する闘いなくして自分自身の成長と進歩に対する闘いはない」という自己の怯懦を許さない厳しい闘いであった。

昨年末に『資本主義論争の群像』（ミネルヴァ書房）という本が出た。いわゆる「講座派」と「労農派」との論争を中心に、戦前（昭和二年）から敗戦直後（昭和二〇年）までの論争の人と時代を画いている。依怙（えこひいき）がなくて清々しい。向坂先生とゆき夫人が、マルクス、猪俣津南雄、山田盛太郎について回数多く登場する。早逝した猪俣（昭和一七）、野呂（昭和九）らは別にして、当時大勢の学者が軍部ファシストに膝を屈していくなかで、先生は志操を全うされた。戦前の輝けるマルキストが、戦中は輝けるファシストとなり、戦後再び輝けるマルキストとなった平野（講座派の総帥）らとのちがいは歴然としている。この本はそんなことも浮き彫りにする。

私たちも先生のように一途に生きたい。社会主義の旅を自覚して、自分と闘いつづけた。いまは、思い出に耽るよりも先生の著書に学びなおすときである。

(H)

## 社会党第四九回大会と路線問題

— 総括への基本視点 —

思想闘争は正念場

本誌一月一日発行(第二五二号)は、第四九回党大会にむけて「『道』廃棄反対の『物質的な力』の構築を」と題する小論を載せたが、そのなかで、本年度の課題についてつぎのように述べた。

「したがって、『構想』にもとづく『参加・介入』路線、およびその具体化としての『中期社会経済政策』は、われわれが本年度においても全力をあげなければならぬ反原発、反行革闘争等々と真正面から対立し、ますます矛盾するものとならざるをえない。したがってまた、今年こそ、国鉄闘争を軸とする反行革統一闘争に全力をあげることを通じて、科学的社会主義(『道』の路線)を擁護し、『構想』にもとづく『参加・介入』路線を理論的・実践的な破壊に追いこむための『物質的な力』を築きあげる必要がある。敵が国鉄合理化を軸とする行革合理化をいよいよ本格的に強行してくる今年こそ、そのための条件が好むと好まざるとにかかわらず成熟するであろう。

かつて国労の提唱した『民主的規制』という名の『参加・介入』路線が、国鉄合理化、とくになりふりかまわぬ国労つぶしの攻撃のなかで、『構想』やその具体化としての『中期社会経済政策』もかならず現実的に破産するであろう。したがって、本年こそ、国鉄闘争を軸とする反行革統一闘争に全力をあげることを通じて、われわれ自身の手で『構想』の路線を理論的・実践的な破産に追いこみつつ、『道』廃棄反対の『物質的な力』を構築する必要がある」(八〇九頁)。

そして、その最後を、つぎの言葉で結んだのである。

「したがって、国鉄闘争を軸とする反行革統一闘争が正念場を迎える本年こそ、同時に、『道』をめぐる思想闘争も正念場を迎える年になったということは、けっして偶然の一致ではない」(一〇頁)。

任務はさらに重大に

第四九回大会は、周知のように、二日目の深夜から三日目の午後にかけて、紛糾に紛糾を重ねた原発問題一本にしばられたかの観があった。したがって、新聞各紙はいずれも、原発問題で現実路線は、大きくつまずいた、が、路線問題は比較的、すんなり通ったという見方をしている。たとえば、一月二日付の朝日は、「社党路線さりげなく大転回」という見出しで、つぎのように書いている。

「先週末に終わった社会党の第四十九回定期大会では、論議が原子力発電所の問題一つにほとんど集まり、世間の耳目もそれに奪われた。しかし、その陰に隠れて目立たなかったが、この大会が採択した『新中期政策』は、社会党の路線にとってきわめて大きな意味をもつものだった。これによって、いま『主義』を変える途上にある社会党は、高いハードルをまた一つ飛び越えた」。

そして、この記事は、その最後を「『ニュー社会党』のいわばマルクス離れは予想以上

の急テンポで進んでいると見なければならぬだろう」という言葉でしめくくっている。

ところが、この同じ朝日新聞が、同じ日に「正念場の石橋ニュー社会党」という見出しの社説を掲げて、「原発反対と並んで多くの代議員が訴えたのは、反行革闘争の強化、とりわけ国鉄の分割・民営化に対する反対運動の強化であった」こと、しかも「社会党は十二月の次期大会で新宣言を策定することになったが、そのスケジュールは国鉄問題と重なってしまふ」ことに一定の懸念を表明しているのである。

周知のように、その翌日に向坂逸郎社会主義協会代表が亡くなられたが、その向坂代表の死去による社会主義協会の影響力の低下をマスコミがいつせいに誇大に宣伝しのも、行政改革という名の大量首切り攻撃が、かつての三池闘争のときとは比較にならぬくらい大規模に全労働者階級に襲いかかってきているときだけに、逆にいうと、社会主義協会の影響力の拡大を懸念していることのあらわれであろう。ということは、向坂先生の遺志を受け継ぎ、国鉄闘争を柱とする反行革闘争と科学的社会主義との結合をはかるべきわれわれの使命と任務がいよいよ重大となったことをしめしている。

#### 原発問題は「前ぶれ」

さきに見たように、マスコミは、原発問題と路線問題とを切り離して、一方では「つまずいた」が、他方は「ずんなり」通ったかのような見方をしている。だが、こういう見方は皮相である。本誌でもくりかえし述べてきたように、原発容認への政策転換は、『道』の路線転換の必然的な結果にはかならぬからである。このことは、『構想』の路線の具体化として策定された「中期社会経済政策」（以下「新中期政策」という）のなかで、この原発容認への政策転換がうちだされたという事実だけをみても明らかである。

したがって、さきの朝日の記事がいうように、「新中期政策」をつくったことによって、社会党は「高いハードルをまた一つ飛び越えた」のではなく、逆に、「飛び越え」るのが困難な「高いハードルをまた一つ」つくったことを意味する。なぜかといえば、『構想』の路線が「新中期政策」として具体化されたということは、その誤りもますます具体的になって、第一線の党員・活動家の肌身にますます感じられるものとなったことを意味するからである。「新中期路線」だけでなく、運動方針にもその誤りが具体化するようになったし、これからますますそうなるであろう。そのことは、今大会でも、マスコミには原発問題の「陰に隠れて目立たなかった」かもしれないが、社公民路線、対「韓」政策の見直し等々についても、『構想』の具体化として、その路線から必然的にでてくる方針上の誤りとして、具体的に追及する議論が数多く出されたということは、路線転換がすすむばすすむほど「飛び越え」なければならぬ方針転換の「ハードル」がますます多く、しかも原発反対運動だけでなく、反軍拡・反行革・反合理化闘争を、国鉄闘争を軸として構築すればするほど、その「ハードル」がますます「高」くなる必然性があることをしめした。今大会が原発問題で「つまずいた」のは、その一つの前ぶれにすぎない。

もちろん、今大会では、原発容認への方針転換が、『道』の路線転換の必然的な結果であるという認識が「まだ不十分であったことは事実である。しかし、いわゆる現実路線への転換を、つまずか」せた力が、大衆運動を背景とした力であったことは、協会・社青同をどんなに「規制」しても、その「ハードルを飛び越え」ることを妨げる障害を除去するこ

とはできないということもしめした。

マルクスのいうように、「理論もそれが大衆の心をつかむやいなや物質的な力になる」。われわれが『道』の廃棄に反対し、『構想』の路線を確立させる「物質的な力」を、国鉄闘争等々を通じてつくりあげる必要があることをくりかえし主張しているのは、誤れる路線を粉砕する「物質的な力」も、大衆運動をぬきにしては真に構築することはできないと考えるからである。

### 反撃への条件は拡大

したがって、『構想』の路線が、いよいよ「新中期路線」や年間の運動方針として具体化されたということは、今大会における原発問題が如実にしめすように、これからはいよいよ現実の運動の生きた指針となりうるかどうかが問われることになり、大衆運動の「物質的な力」によってつぶされる運命もいよいよ迫ってきたことを意味する。その意味で、「新中期路線」の作成は「高いハードルをまた一つ飛び越えた」ことを意味するのではなく、逆に、「飛び越え」るのが困難な「高いハードルをまた一つ」つくったことを意味するのである。

香川県本部三野優美代議員以下四四名の修正案（後掲）が取り下げられたのは、『道』と綱領を「歴史的文書」にするのは、「新宣言」が採択された後のことであるとの見解が明確にされるとともに、「新宣言」の決定にあたっては、全党が一致できる最大限の努力を払い、下部討論も民主的に保障するとの書記長見解が表明されたためである。以上に述べてきたように、民主的討論と全党が一致できる最大限の努力がほんとうに「保障」されれば、「新宣言」策定の「スケジュール」が国鉄問題と重なってしまうことになる今年こそ、理論闘争と大衆運動との総合によって、『構想』の路線を粉砕する「物質的な力」を構築することができる。というより、このことをなんとしてもやりきる以外に、党・労働運動の階級的強化を達成することはできぬからである。

### 運動方針（案）に対する修正案

#### 「道」と「綱領」の調整について

「道」は結党以来の理論的・実践的な討論が集約され、今日までわが党をはじめ勤労大衆への道しるべとして党の歴史とともに歩んできました。

多くの党員は「道」に学び、自らの人生観として党生活をすゝめ活動の原動力になってきた党の綱領的文書である。

今大会で綱領とともに、いとも簡単に歴史的に文章として棚上げする提案がなされていますが、とうてい全党の合意が得られるものでなく慎重に取扱うこと。

従って原案二頁四行目〜一〇行目「このため……党の歴史的な文書とします」を削除すること。

「検討委員会」の討論経過についても明らかにされず、又、新宣言なるものの性格・内容も明らかにしていない段階で「道」と綱領のあいまいな処理には反対である。

全党の討論を保障し、全党の合意のもとで決定すること。

提案者 香川県本部 三野優美以下四四名

## ◆投稿◆

## 右傾化に強まる反抗

— 社会党四九回大会について —

日本社会党第四九回定期全国大会は、一月一七、一八、一九日の三日間、日本教育会館で開催された。この大会の評価をめぐって、さまざまな受け取り方がされている。とくに、直接大会に参加した人と、新聞、テレビなどの報道に頼っている人との間には大きな違いがあるように思われる。

そこで私は、大会に代議員として大会討論に参加した一人として、今次定期大会をどのように受け取るかを提起したい。

大会は成功し、党内の意思統一をはかれた、とみている一人に石橋委員長がいる。石橋委員長は、大会終了後の記者会見で脱皮へ自信と銘うって「ニュー社会党」への一步は踏み出した、原発問題でも活動家の気持はわかるが、譲れないものは譲らなかった、といい、中央と地方に意識のズレはなかったと強調している（いずれも朝日新聞）。

## 新聞も中央と下部のズレを言及。

今四九回大会の意義について、マスコミ関係者は、熱い期待をこめて、社会党がマルクス・レーニン主義を捨て、現実路線（体制内化）の道を歩むことを熱望していた。しかし大会終了後は、党内の中央と下部のズレを認め、現実路線にのめりこめない、社会党の現実に関わりなく腕する思いで報道している。

朝日新聞は、一月二日の社説で、大会論議の中で「執行部と下部のギャップ」がしきりと言われた。その実際はより厳しく「ねじれ」ととらえるべきではないか。つまり政権をめざす政党への脱皮を唱える執行部と、批判政党あるいは、抵抗政党の路線に固執する下部党员と、それぞれの志向が大きく食い違っているからである。さらに、原発反対と並んで多くの代議員が訴えたのは、反行革闘争の強化、とりわけ国鉄の分割・民営化に対する反対運動の推進であった。大都市を除くほとんどの道府県代表が「執行部の取り組みは生ぬるい」と批判した、と指摘している。

また、毎日新聞も一月二〇日の社説で、大会を通じて最も鮮明になったのは「ニュー社会党とは何なのか」という第一線の党员たちの戸惑である。党员が政権をめざす政党、現実処理能力をつけた政党、という理念は理解できても、それが日常活動の上で何をすることなのか、という明確な指標にむすびつかず、執行部の側にもそれがきちんと整理されていないことから生じる混乱のように思う。政権をになえる政党への意欲は歓迎するが、なお多くの課題が残されている、として執行部方針が容認されたとはみていない。

読売新聞もまた、一月二〇日の社説で、現実路線を全党的に定着させる大会という位置づけの下に開かれた社会党大会は、原発政策の見直しをめぐって紛糾し、運動方針などの修正という異例の事態を招いた。「ニュー社会党」への脱皮には、なお厳しい「茨（いばら）の道」が残されていることを、この原発問題は象徴的に示している。そして、原発を事実上「容認」しようという方針に対して、これほど現場の活動家から強い反対があることを予測できなかった執行部の判断ミスなのか、と報じている。ただし、同紙は最後に、

社会党の論議のあり方をみて社会党の政策の非現実性に驚いたとか、マルクス・レーニン主義との決別を図る段取りだとかをつけ加えることを忘れないが。

このように有力三紙が、自分たちが期待した方向に進まないもどかさも含めて、党の実態の一部を報道している。

#### 方針は右傾化に拍車

大会に提案された運動方針はじだ諸議案は、石橋委員長提唱による「ニュー社会党」「大胆な脱皮と再生」、そして「政権をになえる党」という方針の下に、現実路線（現状追認）を追求する立場で提案されている。これが具体的には抵抗闘争よりも代案提出による「参加と介入」の運動になっていかざるを得ない背景である。

四九回大会の議案は、階級および階級闘争の分析はすべてなくなり、その上現状追認として、稼動中の原発は容認する。国鉄の分割・民営化には代案をもって闘う。さらに全民労協の路線を支持する、となっているし、党の路線としては、「新宣言」を二月大会で決定し、「綱領」と「道」を歴史的文書としてタナ上げることが提案されている。

組織方針としても、広域総支部、議員支部などが再提案されて、党組織も階級性を骨抜きにされた組織、機能しない党づくりが提案されていた。

これでは、党の右傾化に拍車がかかり、「第二民社党」の道を歩むものではないか、という危惧を党内活動家を持つのは当然であろう、その方針が大会で決定された。これが失望感を与えた直接の原因であろう。しかし、大会の討論・内容は違っていた。

#### 白熱の討論、方針賛成は少数

運動方針小委員会の討議の中心となった内容の一つは、連合政権の問題、とくに公明党との連合政権協議の問題であった。多くの代議員は、公明、民社が自民党との連合政権を追求し、政策上の手直しをおこなっている情勢のなかで、公明党へのスリ寄り連合は、けっきょく、保革連合の道につながり、社会党の路線の転換になる。その危惧は現実の党方針のなかにあらわれている。いまこそ党は主体性を強化するとともに、全野党共闘の路線を堅持して闘うべきである、と発言した。（全電通代議員だけが民社党との歴史的和解を主張した。）

これに対する執行部の答弁は、自民党とは連合しない。主体の強化と連合は相反するものではない。公明党だけでなく、多くの大衆団体も含めた連合である、という内容だけでまったく質問と答弁がかみ合っていない。

政権をめざさない政党はないだろうが、現実には政権を取れる情勢にはない。むしろ、行革攻撃、軍拡、政治反動が進行し、闘う組織の土台である労働運動が右傾化される中で、どのような闘いを組織していくかが問われているのであって、政権をめざして、物わかりの良い、現状容認の党になってはならないし、そうなれば、まさに「第二民社党」になってしまう。代議員の多くはそのことに反対であった。

国鉄問題についても多くの代議員が発言した。その内容は「分割・民営化」に反対するのはもちろんであるが、いま具体的に問題になっているのは「首切り三項目」提案のなかで、

職場で過員がつくり出され、仕事を与えない。出向を強要することが拡がっている。その上、国労に対するきびしい攻撃によって、職場の権利・慣行は破壊され、職場の荒廃が進むなかで、いかに職場労働者を基礎にした闘いを激励し、連帯した闘いを強化するかである。そして、これを反行革統一闘争として高めることが急務である。このような問題意識であった。

この代議員の叫びに、執行部の答弁は、あいかわらず社会党が国鉄の問題は一番良く取り組んでいる。分割・民営化に反対する代案を提案する、という内容のもので、いま職場で何が起きているか、をぜんぜん知っていない。しかし、多くの発言があったため、田辺書記長も自分も「職場に入る」と約束した。この約束を果たせば成果であるが。

このように、代議員の多くは職場末端の声を反映させているが、中央執行部は国会の場で論議になることだけに目を奪われている。大きなズレである。

### 「道」「綱領」と新宣言、一年間の論争

周知のように運動方針案の中に、一二月定期大会において新宣言の決定にともない「綱領」と「道」を歴史的文書としてタナ上げする方針が提案されている。本来運動方針のなかでとりあつかうような問題ではない。新宣言は事実上の綱領となるものだけに、十分な討論の期間を設けなければならないし、全党の手でつくり出さなければならない課題である。しかも、新宣言は決定されないどころかまだ内容さえも示されていない段階で、決定にともない「綱領」「道」を歴史的文書とするというのはまったく不当な処置である。

しかし、新宣言の内容は、現在の中央執行部の方針から考えて「八〇年代路線」や「新しい社会主義の構想」に示された方向であることは十分に予知できることである。そのため、多くの代議員が発言した。まず前提として各都道府県本部で開催された「構想」の学習会について報告された。その内容は例外なしに、「構想」に示されている現状分析、方向について圧倒的多数が反対であったことが報告された。大阪府本部でさえも消極的賛成が一人であって、あとの発言者は全部反対であった、と報告されている。この事実を踏まえたら中央執行委員会「新宣言」など提案できるはずがない。

したがって多くの代議員は、このことを追求した。田辺書記長は、「綱領」「道」の調整は七七年以来七年間の懸案であり、もはや処理方針をきめなければならない。「新宣言」の内容は、党の四〇年間の歴史を踏まえ、二一世紀を展望したものになるが、内容はこれからである、という答弁に終始した。

これに対して、県本部決定を踏まえて、香川県本部三野優美代議員他四四名の代議員の連名で、「新宣言」と「綱領」「道」の取りあつかいを提案している箇所の記事の削除を求めた修正案が提出された。

採決をしたくない執行部は、修正案提出に対して、①「新宣言」の決定にあたっては全党が一致できる最大限の努力を払う。②下部討論を民主的に保障する。③方針に述べられている「伴い」というのは、「新宣言」が採択されたのちということである、との見解表明をするので修正案をとり下げてほしいとの要請があり、提出者がこの要請を受け入れて、最後に石井薫千葉県本部代議員が発言して、これに答弁する形で田辺書記長が前項三項目



を中執見解として発言して、通過したものである。マスコミはいっせいに、「綱領」「道」と「新宣言」の取り扱いは決定されたと報道した。

しかし、以上のように、全党一致と民主的討論の保障が附帯条件のようなものであって、これから一年間、われわれも十分学習して、われわれの手で「新宣言」をつくる構えをもってのぞんでいけば、中執の意図通りにならないし、下部党員の賛成がなければ決定できない。そのことに自信をもって党強化をはかっていく道は保障されている。そして「新宣言」が決定されない限り、「綱領」も「道」も歴史的文書にはならない。

#### 原発は容認せず、本部方針修正

中央本部は一部学者などの意見を入れて、稼動中の原発容認の方針転換をはかろうとしていた。このため下部党員の反発は強く、大会以前から本部に対してはげしい抗議がおこっていた。とくに現地で反対闘争をたたかっている党員は、方針転換は死活問題であるだけに反対は強かった。

発言者の多くは、実際の闘いの現場にいただけに、語気も鋭く、一步も引かぬ気迫に満ちていた。現地闘争をになう人たちは、中央本部の人たちや学者のように頭の中で整合性ができ上がるものではない。

執行部の答弁は、原発反対の党の基本的態度は変わっていない。原発は人命にとっても危険なものである。したがって、原発依存から早く脱却すべきである、とくり返すばかりであった。

そこで二県本部と有志代表から修正案が提出された。その内容は、方針では稼動中の原発については、安全性を追求し、とあるのは、原発容認であり、これは認められないので、削除して、稼動中の原発といえども反対の態度を変えないというものである。本部は、運動方針小委員会では採決をしたら修正案が通る確実な情勢にあったため、運動方針の修正には応じた。しかし、政策小委員会に付託された「中期経済政策」にも同様の文言、稼動中の原発については安全性を追求し、とある方針は変えない、という強い態度をとりつづけた。これには、石橋委員長の強い意思が働いていた。原発反対闘争をしている人たちは、これでは帰れないと頑張った。

そのため、二日目から三日目の午前中まで大会は空転した。

もはや派閥は機能していない状況のなかで、都道府県本部代表者会議が事態の收拾にのり出し、稼動中の原発も容認しない、という中執の統一見解によって「中期経済政策」も含めて決定した。その中執の統一見解は、

一、今回の原発に関する政策の提起については、党の機関決定以前に外部に流れ、現地運動に混乱とマイナスを与えたことについては、はなはだ遺憾である。

二、今後、原発に関する方針、政策を決めるにあたっては、原対協など現地闘争をになう方がたと十分な意志統一を行ないます。

三、なお、この中期社会経済政策修正文のうち「安全性を追求し」との表現は、執行部が繰り返し答弁してきたように稼動中の原発を容認するものではありません。

この原発問題は、執行部の黒星のようにマスコミも報道しているが、問題はそんなに単純なものではない。政権をになう党への脱皮、そのための現状容認への転換が、具体的な問題で挫折したのであって、その根底は路線問題である。

#### 広域総支部、議員支部に歯止め

今大会の組織方針には、組織検討委員会の一年間の討論の結果として、広域総支部（支部）と議員支部が三年間の期限付きで提案された。また〇・七％党費や新報代を含めて千円党費を認めるような組織方針も提案された。

党費制度の一元化を求める党員の声と広域総支部（支部）、議員支部の設置については、反対が強く、そのため、組織検討委員会を設置して、一年間の検討をすることを昨年の大会で決定し、ブロック代表も含めて検討委員会で検討された結果となっているが、内容は中執の強い意向、とくに石橋委員長が党員を増やしたいという強い気持が反映している。

すでに、百万党にもとづく党員拡大は各地で破産している。財政の上からも各都道府県本部や総支部で、大きな障害となつて、運営ができなくなっている。そのため物資販売活動が活発にとりくまれてきているし、長野県本部は大会において全党員一％党費を決定している。

百万党建設という社会主義政党として自殺行為のような方針で党員拡大を実施した結果、党員の間には活動には参加しない、収入を少なく申告して、党費を安くする。カンパや物資販売には応じない。そのような傾向が強まって、党活動の後退をもたらしている。したがって、多くの発言者は反対の立場で発言し、削除を要求した。

執行部は、入り易く工夫した。労組からの大量入党のためと答弁した上で、その組織拡大方針は原則でなく、十二万党への暫定措置であり、三年間の期限付きのものである、と答えている。しかし、これでも代議員は承知せず、削除を迫ったが、北海道本部の発言「北海道本部は広域総支部、議員支部の方式はとらない、方針の中でも都道府県本部の同意・承認が必要なので、それを重視する」との発言もあって、修正案を提出しなかったのであつて、問題はつみ残しになっている。そのため党中央は、全国組織部長会議の開催、ブロック会議を開催して、徹底をはかるうとしていく。

実施するにはこれからであり、まだまだ各都道府県本部段階で討論が残されており、しかも大部分が反対であつた事実とともに、われわれの手で党建設をはかって行かなければならない。

#### 強調された反「合理化」、反行革闘争

労働運動の分野では、方針の上で「反合理化闘争」は消え、反行革でなく「国民行革」の推進となっているし、はじめて労働戦線の統一のために「全民労協」を支持する方針になっている。

この方針に対して多くの代議員は、行政改革攻撃の中で首切りが進行し、労働不安、生活不安が拡大していることを強調した。

しかし、中執答弁はすれ違いで、「反合闘争、階級闘争は変わらない。しかし技術革新は合理化ではなく、参加と介入で労働者の意見を入れていくべきだ」「全民労協は、私鉄

総連が入り、全電通が入り、全専売が入れば、同盟よりも総評に近くなる」などとまったくはずれの答弁に終始した。

労働運動を体制内化させるための総評の解体攻撃が強まり、そこを土台にした社会党右傾化攻撃がいつそう強まっているなかで、労働運動に対する党の方針は、そのことを意識しているかどうかは別にして、客観的にはまさに、その独占の意図に乗せられていることは間違いない。しかし、社会党の下部は健全に機能していることを発言は証明している。

社青同と青年運動についても、中央本部は社青同中軸論をはずし、三つの青年運動と平等につき合う方針となっていた。現実の青年運動をになっっている実態とは合わないし、一つの政党には一つの青年同盟であるとして、各地から社青同が青年団結集会の結集と労働運動、青年運動の中で果たしている役割が報告された。これには青少年局長も次のように答弁せざるをえなかった。複数は青年運動論であって組織ではない。青年同盟は一つであるべきで、運動の中軸は社青同である。青年共闘、団結集会は評価している。

#### 党強化に自信と責任をもとう

すでに書いてきたように、方針や議案はたしかに大会を通過した。しかもその内容は大きく右傾化し、第二民社党になる危険性をはらんだ方針である。その上、労働運動の右傾化が進んでいる。その点、きわめて重大な時期に直面しているといわなければならぬ。しかし、党中央の右傾化が進んでも、都道府県本部、総支部、支部の右傾化は進んでいないし、具体的問題で闘う社会党の路線を守ろうという声が強まっている。政構研に所属しているといわれる代議員も、原発問題でははげしく本部を追及している。

いまわれわれに問われているのは、方針が通過したことに失望することではなく、大会で発言された多くの代議員の声に依拠した党づくりをすることである。党中央は、石橋委員長談話に示されるように、今次大会の声を正しく総括していないし、日常的にますます右傾化を強めるだろう。しかし、最終的に党の方針を決定するのは、党員である。このことに自信をもって、機関に責任をもって党勢の拡大に取り組む、いまこそこの当り前のことが、必要ではないだろうか。

上部の右傾化と下部の反抗、まだまだ当分づく党内論争である。今次大会はそれがぶつかり合い、むしろ、下部の健全さを見せた大会であったのではないだろうか。(A)

#### ◇ 編集部だより ◇

▽向坂先生を語る、原稿をすべて「特集号」におさめたかかったのですが、ページ数の関係でなりませんでした。おわびします。

▽たくさんの原稿をいただきました。今後、継続して掲載の予定です。

▽本号は、社会党大会を中心に考えてみました。他にも原稿を寄せていただいています。次号でも社会党のゆくえを連載します。

資料 五項目放棄で三顧問が意見書(全文)

## 「五項目」の取扱いに対する私たちの見解

全民労協の「基本構想」に対する総評の「五項目補強見解」について、総評と全民労協との間でこの一月中に「整理」がすすめられるとのことでありますが、去る二月一四日の総評労戦統一対策委員会で全港湾の反対にもかかわらず決定された総評見解「五項目補強見解」に関する状況と今後の取り扱い(本誌第二五三号、資料参照)は、八一年の第六三回定期大会決定(五項目補強見解を堅持し、その実現をめざして最大限の努力をする)から大きく後退したものであり、重大な疑義があります。

貴単産の運動方針に示された基本的態度とも抵触すると思えますので、この問題に対するわれわれの見解をお伝えし、今後の総評諸機関の討議を通じて、貴単産の適切な対処を要請し上げる次第です。

### 〈見 解〉

一、「五項目補強見解」は、総評が全民労協の「基本構想」をそのままでは承認しないとの態度を、五項目という最低の条件を付すことよって大衆的に明らかにしたものであり、五項目の実現、即ち「基本構想」の修正によって、総評運動・路線の継承・発展をめざす意味をこめて提起したはずであります。そのため総評は、「五項目補強見解」を「堅持」しつつ、全民労協の中に入って徹底的な議論をすすめると大衆に説明しましたが、しかし全民労協の中でかつて一度も討論されたという経過の報告がないにもかかわらず、これを「整理」することがどうして可能なのでしょうか。「整理」とは全民労協の現状を承認した上で、「五項目補強見解」を総評自らがタナ上げすることであり、実質的放棄ではないのかと私たちは危惧するものであります。

二、総評見解は「反自民・全野党共闘問題」以外の四項目は、全民労協との間で合意が可能であると述べています。「五項目補強見解」は、春闘こそ今後の労働戦線統一の基調に据えられなければならない問題」として国民春闘路線の継承・発展を強調していますが、その春闘が七〇年代後半以降、鉄鋼・JIC主導のもとに、低額に抑え込まれ、「管理春闘」として組合員の信頼を失っている現実を直視するならば、「五項目」の中で「春闘再構築」こそがもっとも重要な問題であることは言うまでもありません。

しかし、総評の見解は、春に各労働団体がそろって賃金闘争にとりくむようになっていくから、「春闘を今後も労働運動の基礎におくことは、全労働界で合意を得られる」問題だと割り切っていますが、このような現象的な一致のみをとらえた評価は誤りであるといわざるをえません。

全民労協発足後の八三年、八四年の春闘の経過で明らかのように、全民労協が資本と闘って賃金や労働諸条件を引上げる組織でないことが大衆的に明らかになっている現在、「五項目」のうちの最も重要な「春闘の再構築」が、全民労協の活動の中で生かされているかどうかの判断は、八五春闘を総評が精一杯闘った後で行うべきであろうと考えます。

三、総評労働運動の路線に照らしていうならば、全民労協の「基本構想」は、労資協調主義、反共・反社会主義、国際自由労連指向という総評が同意できない路線に貫かれています。しかし、「五項目補強見解」を確認した八一年の第六三回大会でも論議されたように、労働戦線統一に当っては、路線やイデオロギーを先行させて論ずるのでなく、共通し一致した要求に基づく共同行動を拡大、発展させることに重点を置くとするならば、ナショナルセンターや官公労・民間の枠をこえた全労働者階級の共同行動の積み重ねは、現在まだまだ不十分であります。

全民労協が資本と闘うことを拒否するビッグビジネス・ユニオンを中心とした運動に片寄り、各種の闘いの中で労資ゆ着的の体質をますますあからさまにし、中小労働者の闘いや未組織・不安定雇用労働者との連帯を強化する姿勢に欠けていることは改めて指摘するまでもありません。総評は「全民労協への参加について、選別排除は行われていない」と保障していますが、現に、総評の全民労協参加促進の方針にもかかわらず、傘下の一〇を超える民間単産が全民労協に参加しないのは、全民労協の「基本構想」が特定のイデオロギー路線を押しつけ、これを承認しないものの参加を拒否するという「選別排除」の思想を明文にしているからです。現に、「選別排除」は行われているのであり、思想、信条、政治的立場のいかんを問わず、全ての労働者と労働組合の統一をめざす真の統一を実現するのであれば、例えば、「基本構想」の「重要確認事項」を削除することが先決です。

「全野党との協力、共同闘争」については、現時点での合意形成は困難であったとしても、反独占・反自民の戦線強化をめざし、社会党を中心として野党共闘の強化拡大を図る総評の立場を崩す必要は全くないものであり、逆に自公民連合を目指す中道政党や労働組合の一部の動きにきびしい批判を加えていくことは、社会党・総評ブロックの重要な政治的任務であります。

四、「五項目補強見解」に関する上記の総評方針と併せて労戦統一対策委員会に提起された「全民労協の連合体移行の論議開始に対する総評の対応について」は極めてあいまいであり、私たちは、全的統一の方向が団体間協議の中で明確になるまで、連合体移行に反対する原則的立場を総評として打ち出すべきであると考えます。

五、これと関連して、総評は全的統一をめざした労戦統一綱領草案を提起し、大会で討議、決定するとしながら、この三年間、大衆討議を広範に組織し、検討を深める努力を怠って来しました。総評は今年結成三五年を迎えますが、戦後の平和と民主主義の擁護、そして労働者の生活と権利の維持・向上に果して来た総評運動の役割りは図り知れない程大きいものがあります。臨調行革・軍事大国化・改憲路線をひた走る中曽根の反動攻勢に立ちむかうためにも、今こそ総評は自らの闘いの歴史を総括し、その伝統のよりよき発展をめざして、労働運動の現状をきびしく分析し、真の労働戦線の統一を求めて労戦統一綱領草案の補強修正を行い、大胆に大衆討議をおこしていくべきであると考えます。

一九八五年一月一〇日

総評顧問

太田 薫  
市川 誠  
岩井 章

書評 山崎 八郎著

## 「芸術は永遠か」

本書は、著者が生前発表した論文や、エッセイのうちから一四編を選んでまとめたものである。

第一部は、「労働者階級と文化」と題されたエッセイ集、第二部は、「社会主義の作家・人と作品」で、社会主義作家論を中心に、第三部では「社会主義芸術・文学論」という構成になっており、当然のこととして唯物史観にうらうちされた芸術論集になっている。

第一部では、資本主義社会が自分のなかにある政治的、経済的矛盾を克服する力をもたず、この矛盾の解決が社会主義によってしかなされないということは、世界情勢からも明らかであるとし、文化も又、資本主義的なものが克服されて、社会主義の文化となっていることを説く。しかも、それは革命後、ゼロから出発するわけではなくて、文化というものが道徳、教育、芸術、文学、出版、ジャーナリズム、スポーツまでを含んでいるが、資本主義社会では、特に学問や科学や労働が、ますます細分化され、人間の全面的な発達はめざすべくもなく、文化を創造する人間と、それを享受する人間とがべつべつになり、文化が生産から遊離していること、それを克服できるのは生産を担っている労働者階級であると説き、いつの革命にあっても、長い間の文化革命運動があり、これらの積み重ねが、今日の社会主義国の文化の基礎をなしていることを述べている。

第二部では、著者の専門であるドイツ文学を中心に、レッシング、ハイネ、プエルト、メーリング、ブオルフ、ゼーガース、ブレヒト論を展開している。ここでは、その時代の支配階級とたたかいて、働く者の立場でたたかった作家達の役割を説く中で、文学の歴史と階級闘争の歴史とが密接に結びついており、又、革命文学により、どれだけ被支配階級が闘う勇氣を与えられたかを述べている。

第三部では、マルクス、エンゲルスの芸術についての考え方を紹介しながら特に、ルカーチの理論で補足しながら、社会主義リアリズム論を展開している。又、芸術も上部構造に属するという点、いいかえると、芸術もまたそれぞれの時代のイデオロギーの一部であり、さらにまた「人間がこの闘争を意識してそれを闘いぬこうとする諸形態」の一つである。つまり、芸術も階級の性格をもち、階級闘争とは無縁ではないという、唯物史観の立場から芸術の問題を考える場合の基礎的認識をもとにして、芸術の歴史を説き、「芸術の永遠性」（芸術の上部構造論を否定する）という問題についても説明している。

全体としては、書かれた年代や対象にかなり違いがあり、読むのに根気のある論文もあるが、著者の書かれた『青年と文学』（労大）や『マルクス・エンゲルスの文学論』（岩波文庫）と合わせて読むことをおすすめしたい。

最後に、西ドイツの共産党がまいたピラを紹介する。「ペートウベンは、カラヤン（豪華な生活をしているし、入場料は高い―筆者）のためだけに作曲したのではない」

（労働大学刊 定価一五〇〇円 野宮 浩）

## 向坂逸郎先生を語る

### 規則正しい毎日の生活

富田 敏美

わたくしが向坂先生のお宅でお手伝いをしましたのは七六年一月から七九年九月までの間です。

その頃の先生は、外出されることも少なくなり、多くは書斎で原稿書などをなさっていました。それは規則正しい毎日でした。ちょうどわたくしが夕食の準備にとりかかるころになると、先生は仕事の手を休め、散歩にお出かけになります。その時には必ず「今日は何だ」と台所をのぞかれ、いつもきまった皮肉をおっしゃいました。コロッケならば「今日もコロッケ、明日もコロッケ、これじゃ毎日毎日コロッケ」という歌、ギョウザの時は「銀座の相撲取りがやっている店のギョウザはうまかったなあ」という具合です。

また、先生のカミナリは有名だと、大きなカミナリの数々のお話を奥様から伺いましたが、その頃は大きなカミナリを落されることもありませんでした。ただ、だらしないこととは非常にお嫌いでした。「僕はバアさんにトイレに行っても五分で出て来い、いつ敵が攻めてくるかわからん、と言って育てられた」と機敏に行動するよう、いつもおっしゃっていました。風呂もあまりのんびり入る人は叱られていました。ある時、時計を見ていると三分で出て来られた方があり、どのように入浴されるのか、今だに不思議です。

毎週土曜日には資本論学習会が行われており、二十人位参加していました。先生は、この学習会を大切にされました。また、学習会が始まる前には必ず『資本論』を読み返されるのです。そのころ先生が色紙に書かれた「勉強、勉強、また勉強」とは、まさに先生ご自身のお姿でした。

七八年夏からは関節炎を罹われ、暮から翌年三月までは前立腺肥大の手術で入院されました。奥様が影のようにびったりと寄り添って看病なさいました。御高齢でしたからずぶん心配いたしました。先生は来る日も来る日も病院の中を歩かれました。はじめはその階だけ、次第に外来の待合室まで足を延ばし、そしてとうとう治されたのです。歩くことによって病気に勝たれたのです。その時も、先生の何ものにも屈しない意志の強さをみた思いがいたしました。

「僕が死んでも、革命の時は墓石が動くからな」と先生はおっしゃっていました。立ち並ぶたくさんさんの赤旗の中で、あられずりの大きな墓石が、群集の歓声にあわせてグラグラッと揺れ動く。そんなことが起こり得るような気がしてまいります。

### 日本のマルクス・向坂逸郎先生

中澤 秀行

大森義太郎、児島健剛といった人々の闘病生活や死について書かれている先生の文章を読むと、徹底した唯物論者としての死生観に胸を打たれる（『戦士の碑』労働大学刊、『わが戦士たち』社会主義協会刊、『若き僚友の死』文芸春秋刊等々）。それは社会主義者の哲学そのものであると思う。

自分が亡くなられた時どうするのかを、百瀬嘉郎先生と語られた内容が活字になっている。火葬にした骨を、百瀬先生の田にまくとか、薄川にまくとかいった半ば戯れ的な内容である（『新・私の社会主義』至誠堂刊）。私の生家は松本市里山辺薄町にあり、近くを流れる薄川と、片葉のススキのある薄宮は子供の頃の一番の遊び場で、カジカやイワナを

捕り、草野球に興じた思い出の場所である。また昨年、百瀬先生の家の隣を通る延長六百メートル、幅二メートルの道路が田園の中を貫通した。濱地の約半分は百瀬先生所有の田地であった。勿論、本質は独占資本への奉仕としての公共事業であるが、この田地買収の担当はこの私自身と、松本市職労で一五年にわたってオルグ書記の任に就いていた私の良き理解者の一人である輪湖武男氏であったのも何かの縁であろうか。

「わが道の行くべきは墓場である……。死ぬことはだれだっていやだろうが、これは致し方なき次第である。死んでしまえば、すべての人が、化学符号でしか言い表わすことの出来ない物質になることも、どんなに文化が進んでも致し方ないことである……。一人の人間が、百年に足りない間しか生きられないということは、まことに悲しいことに相違ない。しかし、いかんとも致し難い自然必然性である」(前出書)。

と述べる向坂先生の生き様は、生命のほとばしり出る八七年の人生であったことが私達を惹きつけて離さぬのである。

最後に向坂先生にお会いしたのは八二年一月六日の朝、松本の罪温泉に於いてであった。前日、百瀬先生より「訪ねるように」と連絡をいただき、雪道を扉へ出掛けた。この道は日本で最初の社会主義政党である社会民主党の創設者の一人で、その事務所を彼の家に置いた木下尚江が、松本中学時代に美ヶ原高原への遠足で通った道でもある。

当時八五歳の先生であったが、名指揮者カール・ベームが晩年にウィーン・フィルの指揮台に棒を持って立った時のように、シャリッとされ、いつものように限りなく優しく、しかし、何とも厳しく、一時間余にわたって人生を論じられた。

「今の若者は幸せだ。僕達が勉強を始めた頃は、マルクス・エンゲルスの著作を読むには独語、英語といった外国語の勉強からしなければならなかった。それに本を捜し求めるのが大変であった。ところが現在では日本語訳でマルクス・エンゲルスの著作はすべて手に入るし、文庫本でさえ買ひ求められる。学習は難しいとか、時間がとれぬのが悩みだといふのはどうかな。我々の訳したマル・エン選集(新潮社版)はとにかく読んでみるといふことだ。勉強には根性があるし、同時に根性は勉強によって培われる」

「八十になったら、日本資本主義発達史を書こうと勉強を続けてきたが、八十を過ぎると物覚えが悪くなり、長いのは書けなくなる。勉強したいことは、八十までにやれるように目標を立てた方がいい」

旅館の玄関まで御夫妻で見送りに出てくれ、ゆき夫人が「命あらばまたお目にかかりましょう」といわれたのが耳に残る。

向坂先生は一七のマルクスが高等学校卒業時に書いた「職業の選択に際しての青年の考察」という作文をいろんな所で引用されている(『マルクス伝』『資本論入門』『資本論』岩波文庫版解題等々)。そして「最も多く人類のために働きうる地位を選び」「世の中全体のために働」こうと志を立て、その次の道を高根に向って切り拓いたことを、そして「万人のための生はいかにあるか」を「社会に関する科学」によって明らかにしたことを、至上の讚美と尊敬をもって受け入れられるのである。向坂先生自身がこのマルクスと同じように生きられたことを否定する事は、誰もできないだろう。「資本が悪い！」と言われる時の眼鏡の奥の眼差しは、清き心の怒りであり、子供以上に純であられた。

向坂先生こそ私達労働者、そして勤労者にとって、「先生」と呼ぶにふさわしい「先生」である。マルクスが死後百年以上経っても世界の労働者・勤労者の胸の中で増々大きく根をおろし、その歴史的役割が重要となって来ていることは、日本のマルクス・向坂逸郎先生にも同じように当てはまる。日本に於ける「墓掘り」の心の中で永遠に生き続けられるだろう。向坂逸郎資本論翻訳の地・松本に於いても、和気誠氏を迎えての月例の資本論研究会が、間もなく三年目に入ることを記しておきたい。

(自治体労働者)



## 先生からの手紙で仲間づくりへ

小林 房 夫

いま私は、小さく部厚いメモの綴りを取り出して六〇年四月二十七日・第二回執行委員会の記録をなつかしく見入っている。

国会請願デモ、六〇春闘のスト戦術、三池闘争の黒い羽根運動などの経過が報告された後、いくつかの議題にまじって、私の三池オルグ派遣が決定している。

当時の私は、私鉄東武労組の専従として東上支部長の職にあり、同時に埼玉県評の常幹として中小企業対策部長の任務についていて、一人息子が生れて満一歳の頃であった。

激発した中小労組の争議を駆けめぐり、国会デモに明け暮れながら、私は向坂先生に手紙を書いた。三池闘争現場の体験などの感想と併せて、高揚したこの闘いの中で、若い仲間を組織的に定着させていくにはどうするのか、といった内容のようであった。

すぐ先生からご返事をいただいた。それには、思想の伴わない運動やたたかいの空しさから脱した、歴史的使命を自覚する労働者づくりの必要性が述べられ、労大から「まなぶ」という学習誌が創刊になったので、手始めにそれで学習活動をやってみてはどうか、というものであった。

たまたま左社を選んで入党していたこともあって、先生の書物から受けた思想的な影響が大きかった私だったが、それを契機にして、特に若い仲間づくりに打ち込んで行っただけに思う。

協会や労大とのつながりが次第に深まっていき、私が専従をやめて職場に戻った七〇年安保の直後まで、私の人生の最も充実した時代であり、その何ものにも代えがたい、生き様の柱は、常に、まさに向坂先生その人であった。

会社を早退して四年になんなんとし、親しくお目にかかった頃の先生の年齢に近づきながらの今日、余りに偉大な存在であった先生の思い出を記すなどは。

講演会に先生のお伴をして歩いたり、お身を案じてのボディガードの一員だったりした日の情景などが、やたらに蘇ってきてならない。おかげで今、たたかいや運動の場で、文字どおり中堅として活躍している、多くの人達の消息をきくににつけ、ただひとしおの感慨にひたるばかりである。

旧冬一子が結婚した。媒酌人の席についてくれたのは、立派に長じた、当時の若い活動家の一人の姿であった。

おだやかな大寒おくり師の訃聞

(埼玉県在住)

## 生まれた子どもに先生の名

浅野 野 隆 雄

「向坂先生が亡くなった」という知らせを受けて、深い哀しみと落胆は云いようがありません。階級闘争の激化の今だけに、もっともっと生きていてほしかったと思うのは私だけではないと思います。会う人達も、「イヤー、ガッカリした。先生から頂いた色紙をじっくりみてたよ」とか、「先生の本を読み返しはじめたわ」とかで、本当に先生の死という重さは一様であると思います。

遅ればせながら、奥さんに「元氣を出して下さい」と便りを出し、二月の初めに先生宅を訪れました。部屋には大きな先生の写真があり、すばらしい笑顔は云いあらわしうがありません。そして私の心配していたよりも事の外奥さんが元氣なので安心しました。先生の看病を自分の親以上にしてくれた和氣さん、十文字さんの事、病院の方でも「実のお子さんだって、飽きてしまいこれ程はしませんよ」という位ですから、あらためて先生と多くの方々との固い結びつき、團結のぬくもりを感じさせられました。

生前、「私が一番なりたいのは社青同の同盟員である」「私の最も信頼する社青同のみ

なさん」といわれていた先生の言葉を今でも思い返します。

全通組合員だった頃、組合の右傾化等でイヤ気がさしていて、思いあまって先生に、ぐちばかりを書いて手紙を出しました。追ってすぐに返事がきた時には驚きと喜びでいっぱいでした。たぶん先生は、「若いから動揺しているんだな、歴史の法則を信じて頑張りなさい」という事でもわざわざ返事をくれたものだと思います。そのやさしさは今でも忘れません。(そんな事があって五月に生まれた子供に先生の名前をつけました。ニコッ)。

手紙の内容を時々読み返しますが、こんな情況だけにあえて全文引用させて頂き、全ての働きたたかう仲間と階級闘争を貫き通す事を、あらためて決意しなおし、先生を心から偲びたいと思います。

「このような反動時代には勇氣をもってじっとしのぶことです。

再び社会の潮流が左に転化する時は——その時はまた流れてきます。必らず。

どこの国でも、潮流にのる時の心の準備をして、再びこの潮流にのる時をじっとまつ以外はありません。そしてその流れは、歴史の流れですから必ずまいます。その歴史の流れにのる準備——それは力をたくわえるのです。それはじっとしているのではなくこれにのる力の準備、今日われわれの力で出来るだけのことをやるのです。

戦争時代は二度ありました。二度の反動ものりきってまいりました。それは何でもない。誰にでも出来ることです。一九八二年 四月末」  
(社青同北海道地区本部)

## 先生のサイン本は「室物」

橋 詰 弥 生

先生と私の出会いは何年前か忘れましたが、四国香川県の川田さんに連れられて先生のお宅へ行ったのが初めてです。その後は毎年九・一五全国高齢者集會に参加し解散後、京都総評の稲村さんと一緒に先生のお宅へうかがうのが私の楽しみでした。先生のメガネの奥より慈愛に満ちた目を見つめて話し合うのは父親に接しているような心のやすらぎを覚えます。

先生の大好物の「ふぐ」はいつも稲村さんが買って持って行かれました。先生は大変喜んで「今晚は『饅頭』が喰べられるウフフ……」と笑いながら言っておられました。その顔は三池闘争の向坂教室の指導者とはつながらない様な笑顔です。話の中で「京都では若者の活動家が育ちにくい、学習・実践と運動はむずかしいものですネ」「いや、大丈夫です。そのような心配はいらない。現在ここに此の様な若者がいるから大丈夫です」と稲村さんを指して言われました。先生の社会主義思想の展望についての自信がこのように楽天的にしているのかと、また『まなぶ』について私は大変失礼な事を言ったのです。「最近の『まなぶ』は何か読みづらい『まなぶ』は一般労働者大衆が手にし読みながら資本の搾取を学ぶ初歩の本だと思ってきましたが、近頃はむづかしくなりましたネ」と言うくと、「そうですか、むづかしくなりましたか！紙面が限られているし、書く先生方も限られた紙面にあれも書きたい、これも書きたいと思つてむづかしくまた固くなる。これには充分気を付けて注意しているが良く言っておきましょう。私はえらい事を言ってしまった。どうしよう。大変な事になったと自分の浅はかさが嫌になりました。帰る道稲村さんは「そう心配しなくても、先生は卒直な声を喜んでいられる」と、向坂先生の『まなぶ』に掛けられる情熱、はかりしれない思想の深さを知ることができました。私は八二年六月郵便局を退職してから社会主義協会京都府支部の事務所に掃除と電話番に来ております。その事をどなたかから聞かれたからでしょうか、八四年四月に『人生は面白い』の著書にサインして載せました。身にあまる光栄です。小さな事にも気をくばり社会主義思想の大切さを身を持って示されたように思います。その著書は私にとって大切な宝物となっています。一九八五年一月二日先生の悲報を聞き、いつの日かお別れする日の来ることを必死かに思っていました。

「風雪にたえし 枯れ木や 梅の花」先生の徳をしのびつつ……

(京都市在住)